The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第８回臨床哲学フォーラム 「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎」に集う人々」の特集にあたって
Author(s)	六郷, 颯志
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 67-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90075
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集３　第８回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎」に集う人々」

第８回臨床哲学フォーラム
「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎（いえ）」に集う人々」の特集にあたって

六郷　颯志

日時：2022 年 10 月 19 日（水）17:00-19:30
場所：大阪大学豊中キャンパス／CO デザインスタジオ&Zoom（オンライン併用型）

【企画趣旨】

この国には様々な「支援制度」がある。人々はその「対象者」として、あるいは「従事者」として、そうした制度と関わりを持つことになる。制度化は、ある支援を持続的に、安定的に、広域的に実施していくためには必要不可欠である。しかし、同時に、そこから“こぼれる人々”がいるのではないだろうか？　制度はまた、人々のあいだに“境界線”を引く。「従事者」が「対象者」と個人的な関わりを持つことは多くの場合好ましくないとされる。しかし、人と人が真の意味で関わることができるのは、むしろそうした境界線から一歩（あるいは半歩）踏み出した地点においてであろう――。第 8 回臨床哲学フォーラムでは、長崎で NPO 法人として、まちなか相談室「風の舎（かぜのいえ）」という関わりの場を作ってきた内村公義さんの活動を手がかりに、上のような問題について共に考えていく。

【プログラム】

17:00-17:05　司会：小西真理子（大阪大学准教授）
17:05-17:35　発表：「不登校の制度的支援の現在：私的経験を交えて」
六郷颯志（大阪大学院生）
17:35-18:15　講演：「まちなか相談室「風の舎」に集う人々」
内村公義（長崎ウエスレヤン大学名誉教授）
18:15-18:30　休憩
18:30-19:10　対談：「自己病名は吉野大輔」
吉野大輔（精神障害者・家族懇談会『風まかせ』代表）×内村公義
19:10-19:30　全体討論

2022 年 10 月 19 日（水）に第 8 回臨床哲学フォーラム「狭間からの呼び声：まちなか相談室「風の舎（いえ）」に集う人々」が開催され、2012 年から長崎県諫早市で「まちなか相談室 風の舎」を運営してこられた内村公義（うちむらきみよし）さん（長崎ウエスレヤン大学名誉教授）にご講演いただきました。また、同時に「風の舎」の長年のメンバーであった吉野大輔（よしのだいすけ）さん（精神障害者・家族懇談会『風まかせ』代表）と内村さんとの対談も行われ、今回のフォーラムの主題となった制度的支援の〈外側〉で営まれてきた「風の舎」の活動をいきいきと伝えるフォーラムとなりました。

内村さんの講演の冒頭では、「やってくるものを引き受けていくこと、それしかない」という『ゲド戦記』の訳者の清水眞砂子の言葉と共に、「風の舎」の基本姿勢が語られています。これは、（講演の中でも述べられているように）「風の舎」が子どもの学習支援に取り組み始めたきっかけであり、その後 10 年来の付き合いをさせて頂いている私に内村さんがいつも語ってくれる言葉でもあります。

“制度的支援”との関わりの中でこの言葉の意味を捉えようとするならば、それは「ニーズ」と「支援」をそれぞれどのように自らの中で意味付けていくかという問いとして考えることができます。「ニーズ」に応えて「支援」を行うという構図はおそらくあらゆる支援・援助の場に共通するものですが、「ニーズ」の具体的内容やその当事者、「支援」の具体的目標やその手順などが〈制度化〉という動きの中で様々に限定されていくことによって、今回のフォーラムで取り上げられた“こぼれる人々”が出てくることになります。

これに対して「風の舎」の基本姿勢が示すのは、あらゆる「ニーズ」とそこで必要とされるであろう「支援」に開かれて在るという一つの心構えであり、また、言い換えればそれは「ニーズ」や「支援」の在り方を支援の側に立つ者が前もって規定することはできないのだという一つの哲学であるように思います。このような「風の舎」の姿勢の中には、「臨床哲学」の理念との共通点も多く見出せるのではないでしょうか。

『「聴く」ことの力――臨床哲学試論』（鷲田清一、1999 年）に従えば、臨床哲学とはある特定の「だれか」の前で、自らも名前を持つ「だれか」として、二人がそうして共に立っている場所から哲学を行なっていこうとする試みを指します。これを支援の文脈に置き換えるなら、（一般化された「支援対象者」でなく）ある特定の手助けを求める人の前で、（個人性を排した「支援従事者（専門職）」でなく）自らも名前を持った一人の人間として、今この場に必要なもの・ことを共に考えていく、という様に読み替えることが出来ます。

そして、こうして互いに名前を持った「だれか」として出会うことから出発する関係の中からは、既存の「医療」や「福祉」に対する疑問の投げ掛けや、それを自ら変えていこうとする姿勢もまた湧き上がってきます。例えば、それは後半の対談で語られる吉野大輔さんの言葉の中に見つかるはずです。吉野さんは「風の舎」が閉じられた現在、同じ諫早市において精神障害の当事者とその家族との橋渡しを目指す「精神障害者・家族懇談会『風まかせ』」を主宰されています。『風まかせ』では精神障害の当事者とその家族が、「病理」をめぐる両者のすれ違いを乗り越え、新たな関わり合いを営んでいくために、少しずつ対話の試みを続けています。

以上のように、第 8 回臨床哲学フォーラムは“制度的支援”の〈外側〉について共に思い

を巡らせることを通して、そこに実存する声に耳を傾けると同時に、私にとっては研究室の掲げる「臨床哲学」を一つの具体的状況の中で捉え直す機会ともなりました。

また、加えて（全体討論などを通して）制度の〈外側〉の活動について、肯定的な視点に限らず批判的な視点から考えることができたことも収穫であったと思います。ここで改めて強調しなければならないのは、本フォーラムの内容は決して制度的な支援の有用性・必要性を否定するものではないということです。支援の制度化は、ある支援が持続的に、安定的に、広域的に提供されることを担保する目的で行われるのに対し、今回語られた支援の在り方はあくまで個別的な実践に関わっています。講演の中でも言及があるように、両者は時に補完し合いながら「支援」の現場を形作っています。

それでもなお、今回のフォーラムの内容を受けて、様々な新たな問い掛けが可能であると思っています。それらに対する応答は、自らの今後の課題としたいと思います。

今回のフォーラムは研究室に入ってまもない私が「“当事者の声を聞く会”がやりたい」と深い考えもないまま発言したことをきっかけに、先生方がその言葉を丁寧に拾い、小西真理子先生を中心に手厚くサポートしてくださったこと、また、登壇された内村さん、吉野さんが唐突な依頼を快く引き受けて下さったことにより実現したものです。

私にとって、お世話になった場所、臨床哲学で学ぶ動機となった場所である「風の舎」の活動をフォーラムを通じて紹介することができたことは、まさに夢のような出来事でした。最後にこの場を借りて、登壇者のお二方をはじめ、先生方、研究室の皆さん、そして当日参加者して下さった方々に対して深く御礼申し上げます。

（ろくごう・そうし）